

教育委員会会議の概要（令和4年6月定例会）

- ◆ 日 時 令和4年6月29日（水）午後2時00分から午後2時51分まで
- ◆ 場 所 教育局 第1会議室
- ◆ 出 席 者

教 育 長	福 田 洋 之	出 席
委員・教育長職務代理者	花 渕 浩 司	出 席
委 員	阿 子 島 佳 美	出 席
委 員	梅 田 真 理	出 席
委 員	川 又 政 征	出 席
委 員	後 藤 由 起 子	出 席
委 員	山 田 理 恵	出 席

◆ 会議の概要

- 1 開 会
- 2 議事録承認 5月定例会、6月臨時会
- 3 議事録署名委員の指名 梅 田 委 員
- 4 報 告 事 項

(1) 令和4年度仙台市標準学力検査及び仙台市生活・学習状況調査の結果について
(学びの連携推進室長 説明)

資料に基づき報告

花 渕 委 員 学力検査の結果として市の平均正答率が掲載されているが、分布としては標準正規分布になっているか。それとも上位群、下位群などの結果としてこの数値になっているか、わかれば教えてほしい。

学びの連携推進室長 個票等が出てきてからになるが、分布についてはこれから確認をしていく。分布の仕方に二極化などが見られるようであれば、それに応じた対策を考えてまいりたい。

花 渕 委 員 学年全体で見るとそんなに悪くないが、個々に見ると、下位群の子どもたちがある一定程度いて、それが全体を左右しているのかもしれないと少し思ったので、大学との分析結果について、分かったら教えていただきたい。

山 田 委 員 学習と生活状況の相関を東北大学で分析されるということだが、これは毎年やっているのか。

学びの連携推進室長 こちらは、学習意欲の科学的研究に関するプロジェクトとして毎年実施している。その結果については、リーフレット等にまとめて配布し、普及を図っている。

山田委員 ぜひ見せていただければと思う。また、調査結果について、結果がこうだったということではなく、何が一番の問題でどういう対策をするのかというところについて、概要で結構なので資料としてまとめて出していただければと思うが、それはもう出されているか、それともこれから出るのか、教えていただきたい。

学びの連携推進室長 問題点と対策については、分析の中で上がってくるものがあり、そちらはリーフレットにまとめて提案する形になっているので、それをお渡しすることはできる。

山田委員 やはり次にどう生かすのかが問題で、昨年も出ているのであれば、それが今年の中の部分に対策として生きていて、その結果、今年はここが良くなったのかななど分かると思うが、いかがか。

学びの連携推進室長 課題をピックアップし、それに応じて、これまで進めている自分づくり教育の取組みにフィードバックしていくという形を取っている。一つ一つの結果が細かく、また、これによりこうなっているといった部分も明確ではなく、様々な要因が考えられることから、そちらも再度確認しながら、力点をどこに置くかということを中心に考え、対応してまいりたい。

山田委員 もちろん課題が1つということはまずなく、要は今まで何年か課題があり、それに対してどういう対策をしていて、その結果、今年はここが良くなっているといった経過が分かる、数値だけで終わらないような調査結果を出していただきたい。

また結果を見ていて、何割超えているからよかったではないような気がしており、じゃあ残りはどうなのか、何が原因なのかと。例えば「いじめは、どんな理由があっても、いけないことだと思う」といった設問に「そう思う」と回答した割合が9割を超えていても、残りの子がそう思わないみたいなところに当てはまっているというのは、そちらのほうがすごく問題で、やはり何割を超えているからいいではないはずで、問題点にもっとフォーカスし、そこを示していただくほうが、これだけ調査をした結果として、良い報告なのではないかと思う。

教育長 調査の結果が出て、分析し、どんなことをやらなければいけないかというあたりはこれからという部分もあるが、毎年やっている調査なので、例えば昨年の結果を受けてどうだったかということをお示ししていくことが大事だと思う。

梅田委員 リーフレットを作って提案をするということだったが、実際に各学校にはどのように返しているのか。

学びの連携推進室長 リーフレットは、大人向け、中学生向け、小学生向けのものを作成していた。令和3年度のもの、子ども版は中学生、小学生の高学年、一般向けのものを今年の4月に各学校に配布している。また、教育委員会ホームページでも広く見られるようにしている。

梅田委員 各学校で、例えばそのリーフレットを見ながら先生方が振り返りをされているかどうか、あるいは子ども向けのものも作られるのであれば、それを使って子どもたちに指導するようなことが行われているかどうかを教えていただきたい。

学びの連携推進室長 ご指摘のように、作ったものがどのように活用されているかはとても大事だと考えている。大人向けのものは、懇談会やPTAなどの研修等の機会に取り上げていただき、活用をお願いしている。子ども版については、ただ結果を説明するだけではなく、授業やちょっとした時間の生活指導の中で使えるよう、令和2年度からはワークブッ

ク形式のものを配布している。今年度も引き続き中学生向け、小学生向けのものを作成して配布し、活用を図っている。活用結果については、これから確認してまいりたい。

梅田委員 なぜ聞いたかという点、PTA向けの研修会等だけではなく、やはりこれは教育に関わる大事な結果が出ていると思う。例えば「先生は、あなたの良いところを認めてくれていると思う」とか「学級では、自分のよいところを認めてもらっていると思う」という設問があり、先生があなたの良いところを認めてくれていると思うと回答した児童生徒の割合は90%前後で5年間推移しているが、残る10%は認められていないと思っている。また、学級で自分の良いところを認めてもらっていないと思っている子も20%から25%程度おり、自分たちの指導を子どもたちがこのように評価しているといったことを先生方が振り返る必要があると思う。

また、「授業のはじめに、自分で授業のめあて・ねらいを持って、授業にのぞんでいる」とか「授業の終わりに、自分で学んだことを振り返っている」と回答した児童生徒の割合は令和4年度が一番低くなっている学年もあり、これは子どもというよりは、先生方の授業の教え方に関係すると思うので、本来であれば、先生方自身が振り返る材料とすべきではないかと思う。せっかくこうしたデータを取っているのであれば、個々の学校、個別のデータの集計を出すかは別にしても、こういう結果が出ていて、何割を超えているからいいではなく、先生自身の子どもへの指導や授業の振り返りに上手に使っていただき、よりよい学級経営や授業での指導に役立てていただく必要があると思う。パンフレットになると重要どころしか上がってこず、ピンとくるところが少なくなってしまう可能性もある。ぜひ年に1回でも、せっかくの貴重なデータなので、自分たちの学校は何を大事にしたらいいか検討するような機会を持っていたければと思う。

学びの連携推進室長 説明が不足していたが、学力検査及び生活・学習状況調査の結果については、各校それぞれで分析をしている。概要的なものとともに、学力に関しては児童生徒一人一人に面接等で返していくというところもあるが、学校の課題を考える際にこういった分析はしていて、それを学校あるいは学級での指導にフィードバックするという点で、毎年各学校で取り組んでいる。

やはりそれぞれ個別に課題があると思うが、そういったところも学校の状況に応じて指導に生かすこととしており、結果が少しでもよくなるよう、学校でも努力を続けていかれると思う。

後藤委員 設問については、毎年同じことを聞いていると思うが、文科省などからどういった質問をするようにといった指示は出ているのか。というのも、コロナによるマスク生活が3年目になり、これから先、違う形での生活状況調査が必要になってくるのではないかと考えている。例えば思い付きではあるが、人の気持ちや相手がどう感じているか分かるかなど、そういったことも調査していかなければならない状況も考えられるので、この3年間、マスクをして表情が見えない経験した子どもたちの状況調査の設問について、少し踏み込んで考えていただけたらと思う。

学びの連携推進室長 設問については毎年見直しをしており、コロナ禍での生活の変化も話題になってきているので、来年度の問題を検討する際、そういった部分も考えてまいりたい。

川又委員 「社会・地域とのかかわり」や「道徳心・挑戦・夢」に関する設問について、これらは学校側が生徒に対して望んでいることを聞いているものがほとんど、例えば「人

の気持ちが分かる人間になりたいと思う」という設問は、そういう風になってほしいというメッセージ性が非常に強く、中立的なことを聞いているわけではないと思う。

逆に、「自由時間」に関する設問で、インターネットやスマートフォンの使用に関する設問は、メッセージ性はなく、現在の状況の調査になっていると思う。ただ、「携帯電話・スマホなどでメールやメッセージのやりとりをする時、どれくらいの時間で返事をしなければいけないと思っていますか」という設問については、インターネットに関する議論の話題としてこういう話はあると思うが、これを知って教育的に何をしようとしているかというところが分からない。また、「どれくらいの時間で返事をしなければいけないと思っていますか」という聞き方で、何分以内に返事をしているかという事実を知ろうとしているものではなく、非常に特別な質問に感じていて、その辺りの考え方など分かれば教えていただきたい。

学びの連携推進室長 この設問は、生活の中にどれだけ、こうしたやり取りの部分の影響が表われているのか、子どもたちの意識の中にあるのかということを知っているものになる。

川 又 委 員 教育的にこの結果をどう使うのかも伺いたい。

学びの連携推進室長 何を優先するかの意識を知っている設問と捉えており、例えば、勉強している途中で、友達からメッセージが来たらすぐ答えないと人間関係のことで不安を感じるとか、そういった部分を子どもたちがどのように意識しているのかを聞くような意図で設定していると考えている。

阿 子 島 委 員 学力検査の内容別正答率の国語の結果について、小学校3年生から6年生は全て「文章を書く」問題の正答率が目標より低くなっている一方、中学生は全学年で「文章を書く」問題の正答率が6割、7割と目標をこえている。「授業」に関する設問で、「学校の授業などで、自分の考えを文章に書いたり、説明したりするのは好きな方だ」と回答したのは約5割で、全体的に数年そうになっている。中学生は少し改善されたが、やはり、小学生の頃から文章を書ける、書くことに慣れるといった授業にもう少し力を入れていただきたい。「ふだんの授業では、自分の考えを発表する機会があると思う」と約8割が回答しており、端的に自分の意見をまとめたり、発表したり、文章に書いたりする機会は今後ますます増えてくると思うので、そういうところにもさらに力を入れていただきたい。

学びの連携推進室長 小学校の「文章を書く」問題の結果については、例年の傾向である。中学校になると改善しており、文章力ということもあると思うが、一つの見方としては、やはり、言語能力の発達段階上の要因もあるのではないかと考えている。確かに、文章を書く機会を授業の中に取り入れていくことも必要で、学校でも取り組んでいるところだが、学年が低いうちは言語能力にかなりばらつきがあり、考えをまとめたり、決められた条件の中で文章を整えていくのに時間がかかったり、難しかったりする要因もあると思う。学年が上がるにつれ、語彙力や文章を作る力が整ってきて、小学校高学年段階から中学校段階になったときには、整理する力や文章を書く力、語彙力のバランスが取れ、しっかりまとまった文章等が書けるようになるのではないかと捉えている。

阿 子 島 委 員 そのような感じは見受けられるが、これはそれぞれの学年に応じた「文章を書く」問題に対する結果だと思うので、成長過程の一部だと捉えるだけではなく、それぞれの学年に応じてこのぐらいいは書いてほしいという仙台市としての目標を持っていただき、文章力をつける指導について、もう少し考えていただければと思う。

花 淵 委 員 阿子島委員から話があった件について、小中の壁ではないが、これは学級担任制と

教科担任制の違いなのかなとも思う。中学校では、各教科の専門性を持った先生方が教えており、もし、小学校で教科担任制を行っている学校とそうではない学校との比較などが可能で、データが取れば、そういう部分も見えてくるのかなと思う。文科省で教科担任制を進めるというような話もあり、仙台市でも高学年教科担任制の講師を入れていると思うが、それを分析することで、学級担任制と教科担任制の違いが見えてくると思う。同じ小学校6年間学んできた子どもたちが中学校でぐんと上がるというのは、中学校の先生の指導力はもちろんだが、その辺りどうなのかなと。また、中学校の場合、1年、2年、3年とクラス替えはするが、先生方も大体一緒に持ち上がっていく。小学校の場合は、5年生時の先生が必ず6年生に持ち上がるというわけではない。色々な先生が担任になることはそれなりにいいのだが、学力と先生方の指導のあり方の相関性みたいなものがもし見えてくるのであれば、仙台市としても小学校での教科担任制を進めることを検討してはいかかかと思うので、少し分析し、結果を教えていただければと思う。

山 田 委 員 「将来の夢や目標を、持っている」や「自分の将来を考えると、楽しい気持ちになる」と回答している割合が、学年が上がるにつれどんどん低下しているのは非常に問題だと思う。結果を見て非常に衝撃を受けたのだが、この原因と対策が今早急に求められているのではないかという気がするので、どう進めるのかの検討をお願いしたい。

学びの連携推進室長 こちらについては我々も心配しているところで、上がっていくといいのだが、学年が上がるにつれて下がっていく傾向にある。自分づくり教育の中身をさらに充実させていくことや、もっと色々な体験の機会、簡単に言えば、夢や希望を具体的に描けるような、そういう活動を考えていきたいと思う。

5 閉 会